

最愛の作り方 サンプル

攻め…高科 佑真（たかしな ゆうま）
受け…松浦 愁（まつうら しゅう）

手術当日――。

「愁《しゅう》くん、愁くんにはもう、おちんちんは必要ないな？」

高科《たかしな》が問う。松浦《松浦》は素直に頷いた。

「ッ……はい……」

この身体はもうずっと前から高科のものだ。高科のために存在する身体。高科が不要と言えば、それは不要なものなのだ。

「きちんと言いなさい」

「僕には……おちんちんは必要ないです……」

そうだ。必要ないのだ。だってセックスは高科に抱いてもらうだけだし、他の人と触れ合う予定も一生ない。射精はしたいなと思うけれど、ペニスがあることで高科が不安になってしまいうくらいなら必要ないのだ。そもそもすでに松浦のペニスは排泄のためだけにあ

る。
それにもう辛かった。貞操帯によって寝ている間さえ許されぬ勃起。それによる寝不足。同じく勃起すら許されないままの挿入。フェラチオ。もう『いらない』ではない。いつそのことなくして欲しい。だって勃起するものがなくなればこの苦痛から解放されるのだから――。

「おちんちん、なくしてください」

「いいこだ。愛してる」

「僕も愛しています」

一年前――

「え、愁?!」

「佐喜《さき》さん……?」

メル友の佐喜の家、庭先。彼は奥さんらしき人と、その腕の中の赤ちゃんに向けて笑顔を見せていた。

お互いゲイで、ゲイ用の掲示板で知り合った。最初は趣味の話から意気投合して、仲良くなって、会ったこともないのに言葉の端々に感じる嗜虐性に惹かれてS Mのパートナーとなった。

連絡はメールだけ。お互い仕事が忙しいせいもあって問題は何もなかった。声が聞いてみたいなと思うことは幾度となくあったけれど『かけても通じなかったら』と思うと電話番号を聞くことはできなかった。

それでもメールだけの関係で三か月続いた。射精管理もしてもらった。

【射精してはいけないよ】

【いつまでですか】

【俺がいいと言うまで】

佐喜は根が優しかったのか、禁止期間は長くても三日だった。

【性欲はどうか】

【射精したいです】

松浦《まつうら》は元々それほど性欲が強いタイプではない。自慰はせいぜい二週間に一度。仕事が忙しかったり何か趣味に没頭するようなことでもあれば一か月抜かなくても問題なく過ごせた。朝、下着が汚れていることに驚き、そしてしばらく自慰をしていなかったことに気付くなんてこともある。

だからはっきり言ってしまうえば佐喜の射精管理は辛くもなんともなかった。けれど『管理されている』という事実が嬉しかったのだ。だから佐喜に合わせた。佐喜も喜ぶし、自分も嬉しい。

【オナニーしてもいいよ】

【ありがとうございます】

普段のメールはセクシャルな内容ばかりではない。他愛ない話も沢山した。お互いの居住地が遠いため、お金を貯めていつか一緒に住もうなんて話もした。会ったら何をしようか、どこへ行こうか、何を食べようか。好きな食べ物？好きな本は？そんな話を毎日した。

そしてそれを信じていた。けれど突然返信が来なくなった。最初の三日は忙しいのだろうと思うことにして自分を納得させた。けれどそれから一週間経っても返信がなく、何かあったのではと心配になり佐喜の家へ向かったのだ。

そう、それもある。住所を知っていた。だから安心してしまっていた。確かに佐喜から住所を教えられたことはない。でも佐喜から送られてきた写真に位置情報データが入っていたことがあったのだ。こんなことはしてはいけないと思いつつ検索すると、一軒家だった。独身でも一軒家で生活している人はいる。親と一緒になのかもしれない。広い家が好きなかもしれない。そう思っただけ何も疑わなかった。

なのにまさか結婚して、子供までいたなんて。

「愁……」

「佐喜さん……」

幸いだったのは、表札が「佐喜」だったことだろう。ああよかった、名前は嘘を吐かれていなかったのだ。

「……ちよつと出てくる」

佐喜は奥さんにそう言うと言を開けて松浦の方へ歩いてきた。一メートルの距離を空けて向かい合う。奥さんは何かを察したのか、赤ちゃんと共に家の中へ入っていった。それを確認して、佐喜が口を開く。

「……すまない。少し前に子供が生まれたんだ」

「……だって、ゲイだって」

「本当はバイなんだ。結婚して、けれど男とも遊びたくて。でも会うのは妻に悪い気がして、メールだけ」

「一緒に住もうって」

「すまない」

本当は色々言ってやればよかったのだ。奥さんにだって、この人ゲイ用の掲示板に書き込みをしています、僕の射精管理をしていました、そう言ってしまうことだってできた。けれど全くそんな気にならなかったのは佐喜が本当に申し訳なさそうにしていたからか。逆切れしたりせず、きちんと頭を下げてくれたからか。赤ちゃんを見てしまったからか。

「信じてたんです」

「そうねえ……辛かったわね」

その日の夜、松浦は行きつけのゲイバーでオネエのママに慰められていた。佐喜のころから戻ったらもう夜だったのだ。だからそのまま足を運んだ。とても一人じゃいられなかった。

「そんな憂いを帯びた顔をしてるとまた悪い男に引かかっちゃうわよ」

「佐喜さんは悪い男なんかじゃ……」

「そういうところ、愁ちゃんのいいところだけど。でも彼は実際愁ちゃんに嘘を吐いていたんでしょ？」

「そうだけど……」

でも信じていたし、佐喜とのやりとりは楽しかったのだ。寂しい夜を埋めてくれた。

「優しかったんです」

「優しかったって、どんな風に？」

ママがもしぼりを渡してくれた。顔を拭う。涙は出ていない。多分。

「褒めてくれたし、ご褒美もくれた……」

「ご褒美って、会ってもないのに？」

「……射精、していいよって」

小さな声で言ったつもりだったけれど、うるさい店内でも奥のボックス席のオーダーを聞き取る地獄耳のママにははっきりと聞こえたらしい。

「……調教されてたの？」

「……わかんない……」

調教をされていたのだろうか。松浦は自分がMであることを自覚している。けれど調教という程のことはなかったように思う。今となっては佐喜がSだったのかもわからない。やり取りを思い返してみても、言葉遊びの延長のようなものしか浮かばない。

「……好きだったのね」

「そうなのかな……」

カシスオレンジの入ったグラスを眺める。もう氷は溶け、グラスはびしゃびしゃだ。

「違うの？」

ママは忙しいのに、ずっとカウンターの中に立っていてくれている。優しい。だからいつも松浦は辛いことがあるとここに来てしまう。

「わからない。信じてたけど、それが恋愛感情だったのか……。奥さんと子供がいるって知っても、嫉妬しなかった。ただ嘔吐かれてたんだってショックだっただけっていうか」
嘔を吐かれていた悲しさと、将来の目標を失った喪失感だった。一緒に住むための貯金ももうだいぶ貯まっていた。

一緒に住みたかった理由。それはきつと寂しかったからだ。ただ一緒に住んでくれる人が欲しかった。それに佐喜はよく松浦を褒めてくれたから、一緒に過ごしたらきつと居心地がいいだろうと思ったのだ。きつと、ただそれだけ。

「そう……。ねえ、私の友達がSMバーをやってるの。行ってみない？」

「え、SMバー？」

そんなもの、初めて聞いた。悲しかった気持ちが好奇心へとすり替わっていく。自分でも単純だなと思うけれど、仕方がない。それに前向きな気持ちは大事にした方がいいのだ。

「会員制だから普通は入れないんだけど、私からの紹介で入れてあげる」

「いいの？」

「ネコちゃんなら会員費はかからないし、身元のしっかりした人しか入れないから相性さえ合えば安心よ」

「ありがとう」

このママが安心というのなら絶対に大丈夫だ。あんなことがあった今日の自分で自分でもどうしたものかと思うけれど、また寂しい夜に戻りたくはなかった。それにこのままママを独り占めしてしまうのも気が引けた。

「連絡しておいてあげるから、顔洗ってきなさい」

笑って言われ、やはり泣いていると思われてたんだな、と苦笑いしてトイレに立った。

「あ、もしもし、私。一人ネコちゃん紹介するわ。とってもいい子だから大丈夫。ただちよつと純粹だから……。ええ。守ってやって。宜しくね。ええ、いつも通り二割、三割で」

ママに紹介されたSMバーはママの店から歩いて十分程のところにあった。店名を三回

確認し、ドアを開ける。

「いらつしやいませ」

ドアのところにスタンバイしていたらしい男性に驚く。店内が暗くて気付かなかったのだ。

「あ、すみません」

「いえ。お名前は」

「愁といいます」

「お聞きしております。どうぞこちらへ」

まるで機械のような男だった。言葉もイントネーションも表情も歩く動作も全てプロダリングされているような角ばった感じ。

店内はやはりかなり暗かった。目が慣れないと歩くのも難しそうだ。必死に目の前の背中を追う。

「こちらへどうぞ」

案内されたのはカウンターだった。六席しかない。それなのにカウンターはかなり広い。椅子は二脚ずつ固まっている。二人ずつのスペースがかなり広く取られているようだ。

「いらつしやいませ」

「お邪魔します……」

バーテンに渡されたおしぼりを受け取り席に着く。温かい。

「お飲み物は何がよろしいでしょうか」

「え、と炭酸ありますか」

「無味とレモン風味がございます。どちらがよろしいでしょうか」

バーで炭酸がないはずないか、と言った後で恥ずかしくなったけれど、バーテンは笑うことなく淡々と答えた。この店の店員は皆ロボットか何かなのだろうか。それともSMバーという特殊な環境では無でいる方が楽なのか。

「レモンをお願いします」

初めての店で酔ってしまうことは避けたかった。カウンター内で弾けるプシュという音を聞きながら店内を見回してみる。

次第に目が暗さに慣れてきた。どうやら店内はかなり広い。入り口から一度右に折れ、まっすぐ歩いた左手側にカウンター席はあった。そこまでは廊下でしかなかったが、その奥に大きく部屋が広がっていた。ボックス席。けれど仕切り板があって客の様子はほとんど窺えない。ボックス席とカウンター席の間に立ち飲みスペースがある。そこではすでに沢山の男が楽しそうに飲んでいた。

SMバーと聞いていたからステージでもあるのかと思っていたけれどどうやらそれはないらしい。カウンターと、奥にボックス席、そして立ち飲みスペース。それだけの店だ。

「どうぞ」

コースターに置かれた炭酸水を一口飲むと、カウンターの奥から男が一人やってきた。

松浦の目の前に立つ。かなり身長が高い。そしてホストのような顔立ち。立ち振る舞いからして恐らくオーナーだろう。ママの友達と言っていたから四十前後かと思っていたけど、どうやら松浦とあまり変わらないようだ。

「いらっしやい」

「お邪魔しています」

「ママご紹介の子だよ。初めまして、ママの友達の安井《やすい》といいます」

「愁です。突然すみません」

「いえいえ。こういう店は初めてなんだよね」

「はい」

「緊張してるね。大丈夫、怖くないよ。カウンターならスタッフがいるから、慣れるまではここでいろんな人と話をするといいよ」

そう言って安井はまた店の奥に消えた。

緊張する。ママの店には行くけれど、あそこはもう集まるのはみんな常連で、客もお互い知った顔ばかりだ。そのせいか出会いもなく、若いときもゲイであると隠していた松浦は二十九歳に至るまで恋愛一つしてこなかった。

だからここは自ら足を踏み入れた最初の一步なのだ。そのきっかけが裏切りであると思うと悲しいけれど、仕方がない。もう佐喜の連絡先も、やりとりをしていたメールも全て消去した。これから新しい生活が始まるのだ。

「こんばんは。初めましてだね」

「ッ、は、はい」

突然背後からかけられたことに驚き振り向く。メガネをかけた三十半ばの男が立っていた。

「可愛いね。ネコ？」

「え、と……」

初めてでいきなりポジションの確認をするなんて。きっとこれはやり目《もく》だ。掲示板で学んだ用語。セックス目的。

「あはは、怯えてる？」

テンションが高い。少し怖い。助けを求めるようにバーテンを見ると、バーテンが何か言って追い払ってくれた。

しかしまたすぐ次の男が声を掛けてきた。もしかして順番待ちでもしているのだろうか。

「こんばんは。可愛いね。いくつ？」

「に、二十九です……」

「あー、そっか、またねー」

年を聞いてさようならなんて失礼だな、と思っているとバーテンが小さく笑っていた。童顔は自覚しているから笑わないでほしいのだけど、ロボットのような男が隠すことなく笑ったのを見ていたら何となく男の失礼も笑って流せた。

三人目の男は二人目から少し間を置いてきた。

「こんにちは。隣いかな」

声だけで分かる。さっきの二人とは雰囲気が違う。落ち着いた大人な雰囲気。松浦は炭酸水を飲もうとグラスを持っていたので振り向くより先に答えた。

「え、と、はい、どうぞ」

「ありがとう」

優しい声に顔を上げると、言葉を失った。その男はまるでモデルのようだった。背も高い。短めの黒髪はジェルで固めているのかウェットな質感になっている。高い鼻。切れ長の二重。肩幅は広く、胸板は厚く男らしい。なのに、男臭くない。女らしさもないのに、綺麗という形容詞が似合う男。

「あ……」

日常ではなかなか見られないような外見に、思わず見惚れてしまった。

「どうした？」

男が小さく笑う。その口角の上がり具合だつてまるで作り物のようだ。

「や、いえ、すみません」

きつと男は見られることに慣れているのだろう。小さく笑うだけで何も言わなかった。

「どうしてここに？」

「あ……」

いきなり核心を突かれた気分。高揚した気分がさつと地に落ちる。きつと他意はないのだろうけれど。

「ああ、すまない。嫌なことを訊いたかな。欲求不満で、とかかと思ったんだが」

男は場を和ませるためか小さく笑った。しかしすぐ、松浦が困った様子を見せる前に話を流したのだと気付く。

「何を飲んでるんだ？ 酒か？」

「炭酸水です」

「そうか。可愛いな。それに正解だ。初めて来たところで酒を飲むのは危ない」

そう言う男はバーテンに「彼と同じものを」と言った。

男はロックグラスを持っていた。茶系のお酒だ。ウイスキーかブランデーのロック。なのに男は炭酸水が用意されると中身の残ったグラスをバーテンに戻してしまった。

「酔っ払いの相手は怖いだろう」

そう言って、静かに微笑んだ。その微笑みがとても優しく、松浦は心が波を打ったことに気が付いた。

「……掲示板で知り合った人と連絡を取ってたんですけど、その人本当は奥さんと子供がいたみたいで」

気付いたら話していた。誠実そうな彼に、誠実を返したかったのかもしれない。

「そうか……付き合ってたのか」

「あ……いえ、違うと思います」

「思う？」

男は不思議そうだった。付き合っていない相手なら結婚していようと子供がいようと関係ないと思ったのかもしれない。

「お互い好きって言ったことはありませんでした。写真の交換はしてたんですが、家が遠いのもあって会ったことはなくて。けど、お金を貯めていつか一緒に暮らそうねって」

辛かったな、可哀想に、そう言われるのだろうと思っていた。けれど男が発したのは全く違う言葉だった。

「心配だな」

「え？」

一体どういう意味なのだろう。先を促すように首を傾げる。

「会ったこともない相手だったんだろう？ それなのに健気に信じて……いいこ過ぎて少し心配だ。ダメな大人に騙されてしまいそうだ」

「……あの、いいこって年じゃないです」

もうすぐ三十ですから、とは言えなかった。さっきの男が脳裏に過る。年齢を告げた途端踵を返した失礼な男。この男はそんなことはしそうにないと思うが、他に理由をつけて去ってしまうのが嫌だった。もう少し声を聞いていたかった。

「そうなのか」

けれど男は年を訊かなかった。興味がないのか、今この席だけの関係だからと思っていいのか。そう思うと少し寂しかった。知ってほしい、と思ってしまうた。

「……確かに騙されちゃいました。いいこではないですけど」

やはり年は言えなかった。なんだ、大人だったのかと思われるのが嫌だった。自分でもずるいと思う。童顔であることを利用して、この男を騙そうとしている。

「いいこだよ。素直で純粹だ。可愛いよ」

（可愛い、なんて）

可愛いと言われることはよくあった。色素の薄い髪と肌。ぱっちりとした二重瞼の大きな目。少し眺めの髪。体毛も薄く髭もほとんど生えてこないから、幼く見られるのだ。

言われ慣れているはずの言葉にドキドキしてしまう自分に驚き何も言えずにいると目の前のバーテンが口を開いた。

「ボックス席へ行けますか」

急に告げられたボックス席。一定時間ここにいるとそちらへ移るシステムなのだろうか。きつとそうだ。だってカウンター席は少ない。回さないと後が詰まってしまうのだろう。

まあ、他には誰一人座っていないのだけれど。

「いや、ここでもいい」

けれど男は即座にそれを却下してしまった。しかしバーテンに困った様子はない。

「ここの方がいいだろう」

「え？」

「ああ、すまない。初めてだから分からないんだったな。ある程度ここで話をして、もう少し二人で話をしてみてもいいなと思ったらボックス席へ移るんだ。しかしボックス席は仕切りがあるしここより暗い。だからまだこちらの方が安心かと思って」

「ですが、邪魔されません」

再びバーテンが口を挟んだ。そんなに早く席を空けてほしいのだろうか。

「いいんだ。彼は初めてだし、色んな相手を見たいだろうから」

彼の言葉にドキリとする。色んな相手。他の相手とも話した方がいいと思われているのだ。彼も席を立ってしまうのだろうか。

（いやだ、もっと話したい）

「あつ、あの……もしご迷惑でなければもう少しお話したいです……」

自分は彼のタイプではなかったのだろうか、だからこの場で終わらせようとしているのかもしれない——そんな思いがないわけではなかった。けれど、離れたくないと思っしまった。

「俺と？ 嬉しいよ。このままここでスタッフに聞かれながらいい？ それともボックス席に行く？」

「え、と……」

（聞かれながらって、えっちな話とかするのかな……）

「冗談だよ、ここで話そう。すまない、少しでも離れてもらってもいいか」

彼がバーテンにそう言うと、バーテンは表情も変えず一メートル程遠ざかった。

「……泣きたい？」

「え？」

バーテンが離れた途端、彼は優しく言った。

「辛い思いをしたんだろう。ちゃんと泣けたかな」

きつと、バーテンがいたから深くは聞いてこなかったのだ。そして今、こうして向き合おうとしてくれている。

（なんて優しい人なんだろう）

「……大丈夫です。……その、多分、ここに来てドキドキして、忘れちゃいました。……僕、その程度だったのかな」

なんだか悲しくなってきた。失恋をしたという感覚はない。むしろ自分の冷淡さに悲しくなった。

「そんなことはない。だって事実を知った時は悲しかったんだろう。そのときの悲しい気持ちも、今それが薄らいだ状態も、全て君の感情だよ。それにここに来たことで君の気持ちも少しでも楽になったのなら、ここを紹介した人も嬉しいんじゃないかな」

「そう、かな……」

確かにママのところで飲んでいれば、拘束してしまうことにはなったが売上にはなった

はずだ。それでもここを紹介してくれた。そして、彼に会えた。

(僕って現金だな)

「ああ、でもやっぱりボックス席に移動しようか」

「え？」

急にどうしたのだろう。変なことでも言ってしまったのだろうか。

「君を狙ってちらちら様子を窺ってる男が何人もいる。ボックス席に行ってしまえば『成立した』と思われるんだ。少なくともここにいる間は一人でトイレに立っても声はかけられない」

それとも掛けられた方が皆と話せていいかな、と言われる。そんなことないのに。だって今松浦が話したいと思うのはこの人だけだ。

「……けど、それじゃあなたが困るんじゃない？」

松浦に話しかけてきたということは少なくともこの場にパートナーはいないはずだ。よほど特殊な趣味でない限りは。それでもやはり気が引けてしまう。今日は良くて、松浦とパートナーと周りの人に思われることで今後困ることにならないだろうか。

「困らないよ。相手がいたら声はかけない」

その言葉に嘘はないようだった。信じて頷く。

「じゃあ……」

ボックス席は想像以上に暗かった。目が暗闇に慣れたと思ったのに、また見えにくくなる。ゆっくり歩いてくれる男に誘導してもらいながらソファに座った。

男は一度席から離れると松浦のグラスを持ってきてくれた。L字ソファの短辺に座りながら差し出されるグラスを受け取る。どうやら新しく注文して持ってきてくれたらしい。

札を言って受け取り顔を見る。まだ目が慣れず、表情は窺えない。けれど直角の位置に座っているせいで先ほどより表情は見やすそうだ。

「どうして仕切りがあると思う？」

「なんでですか」

「えっちなことができるように」

~~~~~

更に一か月後――。

「おちんちん痛い……痛いよお……」

「愁くん……」

毎日何度も何度も射精をさせられたペニスはいりひりと痛む。下着が触れるだけで痛く、もう下半身にはずっと衣類を身に着けていない。恥ずかしさはもうなかった。痛くてたまらない。でも時間が来たらペニスを差し出さなければならない。だってこれは高科のペニスだから。もう松浦のペニスではないから。

「ああ、可哀想に……おちんちん、辛いな」

「辛いっ……おちんちん痛い……」

「見せてごらん」

「ひいっ！」

本日二回目の射精を終えた昼十二時。擦られ続けたペニスは優しく持たれるだけでもひどく傷む。なのに今日の射精はまだ十六時と二十二時の二回も残っている。

「ああ、赤くなってしまっている。お薬を塗ろうな」

これも毎日のことだ。射精した後我に返った瞬間に痛みに襲われ、ぐずぐずと泣き、高科にペニスを確認してもらって薬を塗ってもらうのだ。

「ッ！ 痛いっ！」

「すまない、ほらもう少しで終わるよ。ああ、亀頭のところが血が滲んでしまっているな」

「うう……」

道理でいつもより痛いわけだ。

「っ！ いた、痛いッ！」

痛いところに薬が塗り込められる。手付きは優しいがやはり痛い。なのに嬉しくなってしまう。優しくおちんちんを持たれて、至近距離からじつくりと観察されることが。

「痛い……」

「うん、痛いな……ほら終わったよ。もうおしまい」

「うう……」

痛くてたまらないのに、こうしてお世話をしてもらえることが嬉しくてまた次の射精も受け入れてしまう。回数も多く、痛みもあるせいで射精までの時間が長引き更に悪化しているというのに。

「いいこ。愁くんは今回もよく頑張ったな。ちゃんと射精できて偉かったな」

「うう……」

痛みを受け入れている自分を押し隠し、「おちんちん痛いの嫌なの」と子供のように高科に甘える。高科はいつも射精の後に殊更甘くなるから。

「うん、いいこ。頑張ったよ。大丈夫、ちゃんと白いの出せていたよ」

「ほんと……」

「うん、本当。タマもペニスを覚えてきたから、精液も枯れていないだろう？」

「あ……」

「日に何度も射精できる身体にできたんだよ。いいこ。頑張ったな」

そう言っでぎゅつと強く抱きしめてくれる。この時間がとても好きだ。

「高科さん……」

「愁くんの身体がどんどんいやらしい身体になって、前よりもっと可愛くなった」

高科が身体を作り変えてくれた。そう思うと嬉しくてたまらない。高科の身体になれた。ペニスだけじゃない。タマも高科の身体になれたのだ。

「嬉しいっ」

「うん、俺も嬉しいよ。愁くんがとても頑張ってくれたから。だからもう少し頑張れるかな」

「え……？」

「一日五回、射精できるかな」

「ひっ！」